高野御帳帳
三ノ上
へ13
3664
5

遠州宇佐美門相良

大山道中膝栗毛 三編

宇佐美

婦小柳寄縄の文 三編

作者が義姉の序あるべし 三編

ろくろく猿松ぐつ奉たらぬ

筆ゝの毛ゝ意の馬ハはやれども

ゝと兼ゝと文ゝくゝぐゝばれど

門へ13
號 3664
卷 5

日長の藤の花ちりてそゞめ
夕がゝり黒き著述の作
者ふひらけく今こゝ編り
撰る筆こゝ末こゝの曲馬の
かけハ遊ぶもうけちはうぐ
場ぬ楽人ぐ往還腰対

福井藩
明倫堂
書籍之印

愛ふ文ぐ出うける
こゝの巻

白ゝ衛者作

文政四のゝ
こゝ月のこゝ九

池文庫氏

大山道中膝栗毛三編上　瀧亭鯉丈述

入相の鐘ハ散〳〵花の梢ゆへ引替く。青葉涼しく黄昏の木陰よりさく日暮の麦四方よりひびきく。ちぎめる手ゐ事も出ずこと。むぐらを通さ夕風ハ。昼乃暑さをとゝ忘れて。往ゑ人もいさましく。昔のうれ吉ハ旅ハ道ゆ。旅ハ道ゆ。たとへくも。旅ハ道ゆ。そよれ相撲ゑ。大山参りハ袖持ぶ。石尊参りハ金持と。そゆ〳〵たゝられまいちゝん。

一貫ざ一の〆縄ゑ元遊山の道中。彼徒即三陽福吉両人ハ境木の立場をこちのぐ。摧ぞ焼餅信濃坂ゑど登りつ行程ハ。福七ハ最前の雷よりもおどろ元〳〵つゝまゆや。駕の内よりやく眠を催〳〵皆だんまりそぐ居る。駕の者ちらぐ旦那ゑ元ぐさろきゝゝ大きゑる周逢ッゑ。ありさよナア棒組そゆョなきのぐゑる元をゝこのよゑ〳〵怪我ぐゝぐゝもせう吉ぐねく。徳一ナニサ　ぜんさいゑろちが間ぬけぐゝうのゑぐ

落馬とゐふを有さまでぶ。落駕とゐふがみるものゝ
心がけがつよいイくらの事ぶ。ちらッめとゞめ屐猪う
の事く歩行さ支が有それど其時さえ落さまぶとゐふ
ものとハ「ハテそまそ又めづらしひものしぐ
ぶぶまとぶぶゐふ事ぶ猪又ふ乗なさうまし
た子「のやさまそハ長い事ぶ。今てさそ風流や
ぐ歌又ふ乗うあつて居るそれど二度の時分ハ武ぶさ
支ぶとそぐ紙衣や馬ぶあつふ。紀身をあらして

らるさんぶ。だんぐつさぶゆつくらると。モウ内又ぶぐ
さくいぶゐやふさつく来く。武者修行ふ出ちけさ
ふが。法師式めぐつて我者国のさる峠へうちとそ
日ハ暮うる折——も山鳴震動してきさら。何事
うと。きつと向をゐんと。イヤちそうさい猪がゐを
屐ちとつくく。荒又あまてゐんでくるとちうち
さく「あまとちやちそうしれこんでぶうまし子
「イヤ笑のせく其処の道中がさそふたり細道

だろう。服へ入ると岩屋へ落て仕舞ふ猪。
ご成極めて。ゆゝ小さい石のようなのを拾て。ちゃうと
弁を堅めて待て居ると。ちやうど猪めへ間近く来さ
ゝ。きと周ふ見ると大遠ひ。その大きいのを見て丈が
二間半程。ちやうど五尺斗りもある。実に古い猪
「エヤそれめづらしい猪も有るめぐ。ごろうまたな。
ちさくても周ふ。ちいさ時分。山持も云まゝ。その
格子大きさのハ。なさ変さ。ごろうませんが。云う

そまでの猪ぐ。そまでふたゝめぬ細道を。よく歩行は
たゝ子「エ」のくそふよ。そまのぐけ。けぐのもてのをへると
かゝぐゝ周ふ。ちと見ると。そまで斗りの細道成
ゝのふ。左右へちゝとさゝねへゝゝふゝ。ぎサノ
「ヘエ」呉今ちつ云ゆゝふハよけると。岩へ落ると云
云ちゝゝ。左右へさゝる。ぬそごろうまへけれと
徳「ハテさく夫ごゝゝ。ゝ山。左ゝハ岩「岩の方も
さゝろうまそまい「そまる「そまごぐも左右とちつ

ちゃるうらかし「むづうのい物よのおぐぞ。そまこちら
左ぐも右でも。うつてのいく方よ物くくぐせん
「へイどのも私い一ッこの魚ん子ろる生れぐ。ほる
も腸ふちちぬ事ち。根ろり差わり物ませんと
きまづとこちちせんうう。ツイくでくちまくまくぐ。まぐ
そまこぐも長さぐちちち丈二尺ほうふ。ちるサう五尺巾ぐ
八寸斗の指くぐごぐうまくく子「エ。マアくく大きさん
そうちぐ。ううのいきうふ左くぐせんそれうら

そそぐく乗うと。例の角く突うけ。イヤ角でできぬく鼻
づく。寄うけうふとちる所残心ほううと。ひくまと猪
の脊中く飛びのう。ちうぽを左のあくくるくど「モシ
猪のちうぽい其指ちるのいぬでいぐうまくくまい
「エ。そんちうぐうとゆぎうたのよ「ヘイ「そまこうら
右のあぐ刀を稽くもあ尺ぐ。切ぬ尺ぐ。ぬが
ゆメッせく赤身の色ぐ計残稽ちゆうぐ。ぐまの残切ッ
ても刃ぐたて稽く「ヘエ「ちまもあんまうちゃくく

あるこうふ。ぞまのうちうさまの〜いやうなる所が
みうふ。さもあくぞたく死殺〜てくれるよこと。みなを
こだーそ。むせうやさらよどんどん「モシ且那様
ちうとちづうふお新ヤまんぞのもうこんぞひて
あるまま申ん「ヨイ〜義和〜そまのぐエ引ちん
だうコまとまて「何のあめ其わそら長い猪の脊
中紙たく所「〜そふまとと突ッせん刀ろ猪
えううポッきうあまてとやうせん「イ「そまで猪

めへたね落そふとあせる。おまとが又果殺〜てくれ
ふと。をまて刀をぐうらうとちげまく。両方け
ぐ尾尾をつんで脊へうぐりつのて。猪の行く
方へぞまのまぐくも行ふと。かくぐをえてみとちん
てもかけるこ〜。矢を射るゆうふ七日七夜夫
歩行き。食へおやまくをえを呑。又腹ぐへると足へて
里へ欠出〜て八幡畠へ這入く芋を掘ぐうちひ。
イヤ其息のさきまぐさ。そして芋斗くうふく

欠歩行くんざうう。屁紙をまるてうく。おのゆく
仁田源五後四郎五郎の鼻の穴をもん
ぶひをさせれ。イヤハヤ其ときたとえやうもわく
わどうるいうう。定めて屁をふさぐうとめうてゑを
ゆるとぞ神佛のお助けうゑ先人チョイときん
ぶがさるうとこのうメうと一ッ生うんめのの力を出して。
きんこの沢ぐいとつううつぶううとんざうう。さとうの
猪もいきづとまうてぐうとうきつんうくまうりと

たるまうう。おれもひうとうとう飛ちうゆとまうと
まうとのあうよ。誠ゑ二ッきん金剛力で極んざうう。屁
尾ときん玉をつうんざうよてうう。尾
「イヤうひませう「そうつぐうも猪と一ッ所へ倒て
屁うゑ撫人や百性ぐ集ってううくうんうう
ちうくうまうけれどいのうみゑうがたまうゑ
まうう屁尾ときん玉を根うまうう切ってうく
ちうとて猪をうきて猪を其蘇の毒へ十五

人ぐろが白くもつてゐる。なまろ者の子こきん
玉と。尾尾をゆぎろて居てもつまらねくくとぐぶ
ぞ〜てたるそふと。いくらあるとも。ひぐひろ
「ヘイ」人成教んで脂を一本ぐ明て笑つてもひぐ
冥きうねてこまりきろく居る和く。ぐろ馬ぢ
馬を乗く乗く。ぐんを。コレく。まつの教
そそる成無理こたるそんとさるく。脂ぐ乗ぐ
うう。おまぐ呪をして放してやろうとい。山紀文係を

知るものうと。皆さげまんでいさけまど。ろうて居る
宮年ぐうう。どんる真成さろうんろうとろて。
其馬まれ彩んぐう。腰うう教子のやうるめを出
てふをさきりなぐう。ぐろ内でぶうくいろて
みるうう。三のうへ乗成取そそひるて遠ひうと
ろうてみるうちたくく。ぐくうるひぐ出くく乗て
そうくひうてうう。尾尾ときん乗ぐろうと
居さんうう。サアうんまきの成つぐて乗まを

うぶゲーて見てもちんの家もわくらゝ家の方を
てんおいくおいくろ紙して礼をいへと。馬士へるを引て
禁の方へ出くと出へと形ハ人へまく見つさらゝ伝でも
アリ馬士を唯人でもあるめくまきく山の形でも
あらくらゝ。家へ初て来て見てまろがよろへぞてい
猪も是程で来ぬつぶらゝ。あとへこゝとるひ
くらゝ。山尾ときんを宮へ行ひて。家ハたてく
山の石を猪ゝ尾峠トハ分て。る士の家を馬士扶子

大形形と常ゆきまぶよろへて伴家がきまのくく
其間初めてこゝ小サな宮流生さのゞ今でハ進
紙なる者も稲へ越前国狐の尾峠のまゞ扶子大
明神とのゝそを見ぶハサ「へ」ゆる程ゝ一ゝ沢の
尾作ぶきぶりも行へ「ユ」何今でハ人ゝのひめや
まりてそゝいゝのゞそまで赤ッせくそれて禁
の村へのゝて其猪をよくくゝぶゝやきのつぶれ
さ大きの猪ョゞ皮をゝ膜をゝちゝとゝら

子が三匹出てゞ其腹籠でさえ三匹ゞ〳〵みとゝバサ
ヘイどもも千トおうさ彩人たちあちこちでござる至
まゝ子ナゼく〳〵そまごども其猪を仕留くハきん
玉を掴つぶしくとおり者うと称「そふよ」そまゝ小
まゝ脇ごりゞ子ろてハ女猪ござうまゞ者ゞ
女猪ゞ〳〵ハきんまござうまゞ「エ」されバサ
そまゞどもおをゞ小もつとゞ逃のよ猪ゞ子の成
つと男猪ゞ子を持ものうたゞ〳〵女猪へきんゞ

さるものゝ今小其次ゞコろ〳〵ねく〳〵〳〵〳〵且邪
其後ゝうござどのよ人る獣でもたまゞまゞ
コレ出ゝ私ゝ子ごゞ〳〵実猪ゞ馬士扱ゞ
猪ゞりのせうござそまゞ子度をゝん〳〵〳〵
ヨイく〳〵滝さんいかゞんよ者ねくナゞゞ〳〵〳〵そん
ちゝ者〳〵紙だゞゞんよさるものゝ「ちえ」でる人の
誰 直
嘸とゝとまゞゞ人者やアゞるチョウのよ〳〵ひ〳〵〳〵
〳〵〳〵〳〵そまゞそよとゝまゞ〳〵〳〵者ゞ

まごころの程をうの「イエ」のいとこ嫁でござ
ひとまづ「旦那様」をごぎうませうね「今」
あるもあるえくいろ〳〵ごまでもいくきれをい
ろ〳〵まをうナタ指組「今」ろ〳〵まぐ山茶ごう
其の程ことみ合もあへトのそれ町ものすぐて
旅の人の茶屋「アイ」お客をごぎんまづ女ども「ごそこ」
おあるうお有難ま〳〵ごゐさんごろう「女」あるこ

お義理「ア」。そしてお客ぶなどれまさこぶごぶ
山風呂「ア」ろ〳〵「ア」ろわどそふ客をう。ぬてあ
「世」ヘイ「ア」おまづ左程ろうこちらくいろ〳〵あり
駕籠かきんあるあ「ハイ」〳〵。ヘイ旦那様あ
元是へ元まづ毒「毒」旦那様お使ろさろく。
明日もお供させく下さまし。ぬの世話を先
まさうでごぎうまをうう。歯まで出供いてう
ごぎうまづ歯茶を用帳でごぎうまづぬぬで

まあ、ようこそ、ごぶうまれ。「イヤ」て、無くてまあ、ようこそ、ぶあかまり
一日も、無くてのが、ろちもらくまでどの。あんまりのり、ぶ、ぶ、ぶ、ら
尾ぶらくんで、せろ、わ、ん、ん。翌日いちろと、尾体よ、歩行ん
ようこそ、ようこそ、ようこそ、ぶらくぶ、ぶ、ぶ、

年ごの人ごろ。山賊ゆへ。ろくの世成でろくろくのご
ろう。どまもこぎれいあのがころへ。イヤ今夜を武百
文奪るべエう成ろの成ろうのご「は男もぶのなるゑと
牛り仲ぞ。女の俥をろこ後で武百ごろうとろふ
のふ。ねが成食ろへ。あんろう鞭手用ご「ナゼぐ武百で
きこ女をぶふさる気ごろ「ろまこ愛ろメろろ「ふ
ろあくも縁のねく用ろ来ろ私よ初對面ろうろを
ら逃ろうといろ事ろ「るえごぶぐらがうよひぐく

ふ事やアグろご。沢も考われぐ先成ろふるよいねく。マブサ
男も仕ろ沢ゆごこぐろって小お夜ろリス第一武百ろみの
ひるくろうで一武百の代威光ごろって。荒面の五種
香ごろって先ゲ金玉引ろまこ。部屋や三百の湯
銭不目成ろ目ろるのろ勿論銭づ成除てろ出ごん
ろう「コレサ其様よけろ」て牛りみるけまど。今夜ごろ
メて月有るろごぶぐ。をろうちろと考へかゆのーうろよ。
がまイルーて　ゆて下ワーへン。まごあろてもこわくこをふ

てめへひとう美知していろいろおしんは男も
あんまり芸事を芸ごそ其あうも何も極人の紙
ぶらかるのが乃井の名代ぢやのちホ後悔をねへがい
ぜコウ万太郎ホ面のるあの「ヨ百文おこまれまこれ
バ私達合ちこん返す紙お使せちへ「そのつくの紙イ
ヘイ何かよろしくお願ア申ます。相分ま持うッちゃば先
刻の茶紙持来いこまこ。高田の方をお引合下
さりまし「いけづん高井いあまえんがご様ちえんの

年ぞくと極。そんるこ紙いろてくるとこれねへ。おのへを
出来ぢの方よちねへ。「ヨ狂のてきとまのあうが
いぜ「ヨ様。そあちちねへ。おとぢおしへへ
おぢよいぐろふまえのいあねうをちるあねへ。
勿論アノふうハ。仮髪ふめづらしい出来の女ぞ。外の
かとこんと。ぐつと水除がちてるよナア「そこちら
さんもちてもいてでちねへ。ふ実をいるぢとこまの
ホちこ赤ちるよ「ヨちめんとあぢそこちこうちぐエ。今ふ

きっと
絶仕さうどうろう。三百ぐ現金のふ渡しておひく。
先ぐ見てそきせくとこへ入をうぶ。こうちさちさぐかう
しぐのとしぐ工「脱」ムくそまぐいく。きく先人銭を渡し
てもいろ「法」ぜんこひへあろく遠入る府。家氏取まさ
附約そこ戒きめて垂く。あまその銭金沢チョート
二百人沖こもらへあとうえんとういつて やるといへぐ
宮法こまどそまへ手ひるまねへめきるとぐを
手こひ人ぐづくあつてあいの銭ぐとしぬくて

ぶちまろうくあこうら今でこめつこふムくといろわへ
そまへぐあまぶ流義へ第弟ぐ遣一口数ぐ入れくで
きまへぶいくそへしねくと今衣素くムまれへうの丸れ
とぐろくこのこうんぐのとこうあと家の三氏去へて
こうんせろ影ぐもこれへくまぐムくいろれへ「脱」あるあど
そへ炭ケ付べ仏ぶのあろまるらいろへまぐへ仮盛へ
郡百ぐくりあこ宮素陀へ「脱」アくそまへむくうら
きまろてゐる仏 九中まかこい女もみろうれどそれ

ありておまごぶ源義が一まい紙こんとれべのう
きまるまごぶ角　ろくとこ紙ふきまれでまるれべ
いっぱくめんぶ「福」まえの二有斗りきれくもきこれくもいる
めうそんまふ先ちまもきまるよサア大紙でもうう
ろうう「福」でもかまうひめうようく　コウ紙へこうんぶ
紙てト今腔紙ねくくるとチョイト紙治ちうこそで
まうぶ宿　第代を紙有めう集ふべ是も有つまうく
紙てまべく取てやぶちぶへ「福」まるわぶ是へちぶへ福へ

ト　女腔をおまり　「おまごぶ」腔紙こそまけう「福」
かまひまさんまめのぶ腔紙こそまけう「福」
おまうけのおまうひのをお哲へまうま「福」
田姫殿田殿ふ「福」「福さん福」紙ふへひとう紙へぶ是
てうゆやふく
できまるう「福」ふへ福ぶ紙ふで分ふうちぶまる田へ
「ナニ福」紙ぶまへまう出へ紙まこまふうう糸りの
きく
宮ふい　まり福紙ぶのうめうむぶうのるをいへ
男ぶ　福ハット福　「福」ねぶナ其ふ　ぶやァねくる是でも

今そよいつこちやアねつそーて是できまるうとハ
なづきまるのごエ。エ　なもへむひきまるきるとも
えざいく　塩梅ごゑう　塩さん「山男もいろく　まうぜ
あがる　嬉の　ちうぐが　平ばいく　塩梅ゑら　おきーどなぐ
ひとうでへたうめへのう「平ゑ」のこちさナ　鉾ホ　必ず
梅ぐきうーぶいくこういるめう　知まさあつさアノウ
塩さん「ヲホ〜〜〜ぐのせうこーぐめ　梅チ　めめ
おきうーぐでへおまはいくまんぐごゑせう　こうて

たんとおこうちきいやう　ヲホ〜〜「ゑ」　ゆつてえねへゑ　ゆり
いよ。おめへの　おきーどなぐ　ちふ　きまめいふねへめう。そりやア
いぶ　塩さん。まぐこちめへ　ゆ　ゆてあるう「ヨヤそこへ又。ゼ
ちちと　ゆり　ゆ　ゆ　ゆ

服粉ごもうんな「ドレヨヤ。ちりやァ又あん
まり色まぜるなんト福七ぶ新を尽くヨヤ人の変式いひ
ぶらぶら。系もト腹さーきれば福七ぶ服ごろ式「どうふ
外て居る「地ごろ「喰さこいかこと「福ちえのろさびつ
させこァ「地ハこめーっつぶつさろてそんわうふ
きの式つぶに変がわるめっ屋ぶもろつさん
ちめくー。イヤあとちらぶんよち福ふちうふ。この
あるえも。えの中でも。あいそ式つされてんきわ。

「地系ーーつちうれで脳をんとあづるおうがぐさんで
ぶざりまいよ「福ちるくえんるこまいくる式いってると
いろまぶくも切がわくぜ。山人を内ふいると。三式日ホ
ひの干物式新教ぶ喰ようり外ホ菜くいふのものを喰さ
変がわくう。後人ゆるこぶちひこぶーてるるわく
あーこん又いちんちちまるるーくぶるぶモウ脳式ぶり
よってえわ。こきこく今きの畠田の支とうぶーきこ系
ちんぶるうり地ぶ式を乗り地ぶるう
「地ヘイまろ平出めんるさいまート地を「地ヨットちりやく

きもをつぶしあきれかへりてものもいはずあきれ
てチヨウトとくきくえんナ「ハイ」何用でござり
ます「ハイ」さうじ紙をとりて書こうと
はこのおきやくさまのおめくこと「ハイ」銅貨一ツ
ものを「ヤ」くそをあんまりおもしろ「ハイ」用でござり
ます「ハイ」ト「ハイ」「イヤ」をとぐおこもかしこまり
ぐらいの「ハイ」。えそうまをうきをつかうて
ありがとうゴザイ「ハイ」かしこまりました

ありがとうございます「ハイ」ゴザイます「ハイ」ゴザイます「ハイ」ゴザイ

こう押付て置て（福）酒を利ゝしておいてう
すゝぎやあるうえんいし（二人ひちうを飲てゐる　ゑゝ　ゑゝ　世一人りつゝおまりに出ル）
（注）「ヨイ」姫君さまたち逃げくまてゝんなチョツト呼しが
ある（世）「ヨイ」をゝ酒とさかなを持ちまつこと
（福）「コイツアゴラギ」法さん一ッぱんをおくれ（世）まゞ拳をする
ろハ早いとゝあるゝ（世）ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
をゝさい拳（世）ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
（福）「ちゞ」ゝ（元）だろうハかゝんくゝ（ゝ）ゝゝゝゝゝゝ「ゝゝ」
カメゝくゝが出てあきれらアとんざあゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

[illegible]「イヤ[illegible]」[illegible]
[illegible]と女たちまで[illegible]義をたさうまし[illegible]
[illegible]雑[illegible]くらい[illegible]
[illegible]「[illegible]」[illegible]
[illegible]「イヤ[illegible]」[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]女[illegible]
[illegible]「イヤ[illegible]」[illegible]
[illegible]「アノ[illegible]」[illegible]
[illegible]
[illegible]「[illegible]」[illegible]
[illegible]
[illegible]「[illegible]」[illegible]
[illegible]「[illegible]」[illegible]
[illegible]「[illegible]」[illegible]
[illegible]「[illegible]」[illegible]
[illegible]「[illegible]」[illegible]
[illegible]

[illegible]「ア」[illegible]「ア」[illegible]
[illegible]「ア」[illegible]「ア」[illegible]
[illegible]「ア」[illegible]「ア」[illegible]

こゞ付よ[とほ]ゝて後ゝに娘の彩く這ゝ
戸逆[まど]ひをして馬の糞て居る彩くいつて
馬の尾を抱[だい]て馬にた彩ふを」てすでのこと
金玉をつゞけ彩ゝつけお免くハ馬ゝもた彩
付ゝを」ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵